

きょうと福祉倶楽部だより

2024年 第6号

心に残ったひとたち②－椿幸治さんのこと

原爆被害に心を壊された日本兵

わたしが椿さんに会ったのは東京足立区の病院で医療ソーシャルワーカーとして勤務をしていた時でした。椿さんは当時葛飾区の養護老人ホームに暮らす身寄りの無いお年寄りでした。

決まった曜日に受診していた椿さん。わたしは被爆者の被爆後をテーマに学生時代を過ごしたことから極力被爆の実相を聞き取って何か必要な支援がないかを探っていました。彼の顔を見るたびに彼の被爆体験を聞かせていただいていた。

壮絶な体験が彼の生きる力を奪っているようにも思えました。「わたしは原爆に被爆したから身体のおちこちがおかしいんだよ」といつも力なく語ります。

椿さんが被爆したのは暁部隊に所属する日本軍兵士として、広島市内の比治山国民学校（爆心地から2.8キロメートル）で8月6日の朝校庭で点呼を受けているときに被爆しました。

それを起点にした「あの日」の彼の被爆体験は想像を絶するものでした。

「校庭で点呼を受けていると突然光と爆風が襲い皆倒れていた」

「上官ととりあえず本隊がいる宇品港に戻ることにした」「その道すがら多くの人が死んでいた」「橋の欄干に挟まれていた子どもがいたけど、上官がいまは自分を守る為に動け、子どもは放っておけと命令され、本隊に帰った」

そしてようやくたどり着いた本隊で彼は舟艇で広島川を上り、救援を命令されます。ところが川を上ると、火災から逃れるために川に入り絶命した人が無数に浮いています。そしてまだ命のある人が助けを求めて椿さんが乗る舟艇にしがみつこうとします。

船はバランスを崩し、危険な状態になります。それを椿さんたちは「竹竿でつかまる人を振り払って逃げたんだよ」と語ります。

椿さんはさぞ無力感にさいなまれたことでしょう。そして多くの被害者を「見殺し」にした「罪」の意識が彼の心に突き刺さったままだったのでしょう。

そんな椿さんにわたしは医療と福祉の無力を感じました。彼に何とか生きる希望を取り戻してほしいという想いがわたしの中の問題意識となっていました。

そんな時知り合ったNHKの番組ディレクターから取材についての相談を受け、椿さんを紹介したのです。わたしの提案は「椿さんを広島に連れて行ってほしい」でした。その意味は、彼があの体験から逃れて足を踏み入れられなかった広島に立つことで何かを取り戻してくれるのではということでした。

その企画は受け入れられました。そしてわたしは椿さんの同意を得ること、安全に広島で過ごしていただくために勤務先の病院の支援に同意を得るために行動しました。

無事同意も得て勤務先の病院の看護師さんと椿さんの広島旅行が実現しました。

その様子がNHKで「始めて戦争を知った一都会で暮らす被爆者」という番組になり放映されました。

同行した看護師さん、広島での椿さんの様子を帰京後に教えてくれました。「普段は杖でよたよたしか歩けないのに、広島ではすごく速く歩くんですよ」。

また、放映された番組で看護師さんが平和公園の折り鶴を見て「わたしたちも持ってくれば良かったね」というと椿さんは「そんなもん、死んだ人たちは喜びやしないよ」と一言。

そのとおりです。広島で傷ついた人、殺された人の命を尊ぶなら核のない世界を作るしかないのです。

広島から帰ってきた椿さん、あの日を境に力を取り戻しました。瞳に力が戻った椿さんの顔が今もよみがえります。

昭和天皇崩御の年のことでした。



有限会社 おとくに福祉研究所
きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイッ東台101号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

